

南条文雄先生

——近代仏教学研究の先駆者——

雲井昭善

大谷大学の講堂には、歴代学長の肖像画が掲げられている。清沢満之をはじめ佐々木月樵そしてここに登場する南条文雄……と。そこには、大谷大学とその生涯をともした先人が、その時その折の大学の歩んできた道を後進のわれわれに静かに語りかけている。私は、直接、南条先生から教えを受けたことはないし、又、その警咳にすら接したこともない。『南条先生を語る』という点では必ずしもふさわしくないが、先生がその生涯のモットーとしていた『為法不為身』の信念に生きた姿は、深く私の心を把えてはなさない。今、先生の肖像画の前に佇立するとき、この私に何かを語りかけてくるように覚える。それは、先生の留学時代のヨーロッパの佛教研究の生活のようでもあるし、波濤万里の旅程の想い出でもあるようだし、或いは又、帰朝後の教化伝道生活の語りでもあるかのようである。

先生の自著『懐旧録』をはじめ、頌徳記念会刊の『南条先生』或いはその書翰集『南条先生遺芳』など、先生を語る書は幾つかある。そして、明治百年を迎えた今日、わが国の思想界ではその回顧と展望がさかんにとりあげられつつある。われわれの当面の研究分野である佛教研究にあっても、特筆すべき発展がみられた。言わば、わが国における佛教研究は、明治以後においてはじめて近代的科学的研究という方法を開始したのである。そして、その先駆

者として佛教学研究に不滅の金字塔を樹立した人こそ、南条文雄（一八四九～一九二七）その人であることを思えば、改めて先生を語る今日的意義もあると考える。ここでは、先生をめぐる数多くのトピックスから、特に私の胸奥にせまってくる幾つかの先生のプロフィールにスポットをあててみたい。

汽機不使旅愁催。 水送山迎眼界開。

自出東京二万余里。 六旬容易入英来。

一八七六年（明治九）の六月十四日、青年僧南条文雄が学友笠原研寿と共に横浜港を出帆して以来五十八日目の八月十一日、ロンドンに到着した時の感激を一詩に託したのがこれである。尤も、これは船旅ではあるが、二十時間余りで飛翔できる現在の航空事情からすれば、まことに感無量なるものを覚える。英会話の勉強から洋食の食べ方など即席に仕入れたこの東洋の一遊子が、ロンドン到着後間もなく、ガス灯の消し方が分らなくて危うくガス中毒死しかけたとか。そうしたエピソードは他日にゆづるとして、先ず十九世紀中葉のヨーロッパの佛教学界の事情、そして、彼がそこで何を見、誰に師事したか、そんなところから書き出してみよう。

ヨーロッパにおいて新しい佛教学研究がなされたのは、十九世紀の前半である。この佛教学研究に新しい領域を展開する契機となったものは、いわゆる梵語原本の資料発見である。それは、英人ホジソン (B. H. Hodgson, 1800-1894) によるネパール梵本の発見という世紀の偉業に他ならない。ホジソンは、十八歳の時雄志をいだき、一管の筆に身を託して渡印し東インド会社に入った。爾来、駐印ネパール公使などの要職に就いたが、退職（一八四八）後はネパールの佛教僧と交友しつつ佛教学研究に着手し、梵語聖典の蒐集に全力をつくした。その間、一八二六年『亜細亜研究』第四巻に「ネパール及びチベットの国語・文学と宗教の覚書」(Notices of the Language, Literature and Religion

of Nepal and Tibet) を報告し、梵語聖典の豊富な現存を公表した。この報告は、当時のヨーロッパ佛教学界の耳目を驚倒せしめるに十分だった。更に、ネパールで発見した三百八十有余部の梵語聖典の一部がフランスの学匠ビュルヌフ (E. Burnouf, 1801-1852) の許に贈られ、ヨーロッパという Civilized World へもち出された。近代佛教学研究は、既にこの時始まったと言つて過言ではなからう。それでは、ホジソンの梵本発見が何故にヨーロッパの佛教学界を活気づけ、近代佛教学を促進せしめたのか。このことは、わが南条文雄にとつても大いに関係する一点であり、そこには、ホジソン〜ビュルヌフ〜マックス・ミュラーそして南条文雄へという学問的伝承があつづけられるのである。

ホジソンがネパール発見の梵本について報告するまでは、ヨーロッパの佛教学研究家にとつて、インドの佛教といえればパリー聖典である、という觀念が大局を支配していた。従つてホジソンのニュースは、ヨーロッパの佛教学研究家にとつて青天の霹靂にも似たものだったに相違ない。十九世紀のヨーロッパ佛教学界は、ここに新しい夜明けを迎えたのである。しかも、ホジソンの偉大な業績は、ただに梵本資料の発見ということだけでなく、彼が苦心慘澹して蒐集した佛教学聖典をフランスのビュルヌフに寄せたことである。学匠ビュルヌフがこの新資料による研究の基礎を開拓し、ホジソンの恩顧に十分報いたこともヨーロッパ学界の今日をあらしめた推進力といふべきである。このように、十九世紀のヨーロッパ佛教学界は、ホジソン、ビュルヌフという二学匠の学識と情誼こまやかな交りのうちにやがて来るべき偉業の基礎を固めながら、その中葉を迎えたのである。

南条文雄が、大谷派本願寺の海外留学生として学友笠原研寿 (富山県城端出身) とともに渡欧の途についたのは、彼の二十八歳、一八七六年 (明治九) 六月十三日のことである。彼が渡欧の機会に恵まれたのは、当時の東本願寺法主現如上人の命に俟つものである。上人は、さきに渡欧の折フランスの図書館において梵筈資料を一覧する機会を得、たまたま随行の石川舜台にその研究方法を計った。その結果、若い人びとにこの研究を果させようとして二青年が選

ばれたのである。かくて、明治初期にあって全く耳新しい梵筈資料の研究という目的のために、二青年は夢多い渡欧の途についた。日本の学界については、梵語研究熱の勃興に先立つこと遙か以前のことである。

ところで、南条・笠原の両学僧がヨーロッパへ渡った当時、彼の地の佛教学は奇才ビュルヌフの門弟マックス・ミューラー(Max Müller, 1823-1900)が活躍していた。ミューラーはライプチヒとベルリンで梵語を学び、その後パリに留学してビュルヌフの門下に入った。彼は其処でリグ・ヴェーダを研究し、更にイギリスに渡り東インド会社の依頼をうけてリグ・ヴェーダ全集の公刊を完成した。彼の活躍は、オックスフォード大学教授になって後『東方佛敎聖書』(Sacred Books of the East) 四十九巻の公刊を完成したことによって頂点に達し、オックスフォードをしてヨーロッパにおける新学問の中心道場たらしめたのである。彼こそ、ビュルヌフなき後のヨーロッパ佛教学界を代表するにふさわしい実力を備えていた。彼の文藻は極めて豊麗であり、文芸家としても一世を風靡するに足る才智を具えていた。この一代の優れた学人の聲咳にわが南条文雄が接したのは、一八七九年(明治一二)彼三十一歳マックス・ミューラー五十七歳の時である。

二

日本の若い佛敎僧南条文雄君は、一八七九年の二月以来オックスフォードに来ていた。ロンドンで英語を学びながら数年間を過した後、日本公使と前ウエストミンスター寺の教長スタンレー氏の紹介をもってオックスフォードの私の許へ来た。そして、梵語と佛敎聖典に用いられている特殊梵語及びいろいろの方言を学びたいその希望を述べた。……私は、先ず当時の少壮学者マクドネル(A. A. Macdonell, 1854-1931)をしてその指導に当らしめた。二人(南条・笠原)は、文法に関する十分な知識を得てから過去四年間、毎週二、三回づつ私の許へ来て一層難解な梵語の書物を読んだり、まだ大部分が写本のままになっ

て英国に将来されたものである。(『南条文雄』頁八)

この一文は、マックス・ミュラーのことばからの引用である。当時、マ博士はオックスフォード大学において比較宗教学 (Comparative Religion) や言語学 (Philology) を講じ多忙だったので、マクドネルを紹介したという。パーリ学者リス・デヴィッツ (T. W. Rhys Davids, 1843-1922) からパーリ語の研究を盛んに慫慂されたのもこの頃であるが、南条文雄は、何と云っても梵語を習得せよとの現如上人の下命を忠実に守り、その勧誘に応じなかった。こうした一面にも、その性格の厳しさがうかがわれはしないか。

かくして、ロンドンにおける日課は英語の勉強と梵語の習得にほとんどの時間が割かれたが、他方、ロンドンにおける日本学生会での菊地大麓、穂積陳重、桜井鏡二らとの交友によってその行動半径をひろげた。そして、梵本の淨写に没頭し「翻訳名義集」「佛所行讚」「入楞伽經」「金光明經」「法華經」などの諸佛典を筆写した。これらの筆写による閲覽と借用の時間に制限があったので、片手にパンを握りつつも手を休めずに淨写したという。学友笠原研寿も「翻訳名義集」や「法集名数経」「阿毘達磨俱舍論積」などの梵本筆写に熱中した。けれども、過労のため肺患にかかり、一八八二年(明治一四)滞英五年にして帰国の止むなきに至り、その翌一八八三年(明治一五)三十二歳の若さで長逝した。

笠原君の帰朝を見送ったのは初秋(一八八二年)九月十二日のことである。思へば明治九年六月日本を発してここに六ヶ年、寢食艱苦を共にし、志を同じうして佛典の研鑽に余念なかりし友の、業を半ばにして故国に去り行く胸中、又、実に万斛の涙を忍んだ事であらう。……その翌日、我々は小さい馬車に同乗してチャールズクロス停車場に笠原君を見送ったのであるが、これが遂に永訣となってしまったのは何としても遺憾の極みである。

南条は、自著『懐旧録』でこのように追悼している。一八八三年、学友笠原長逝のこの歳、奇しくも南条文雄不朽の大著『大明三藏聖教目錄』(通称「南条目錄」A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka,

the Sacred Canon of the Buddhist in China and Japan, 1883) がオックスフォード大学より出版された。後年、マックス・ミュラーはこう述べている。

南条君は、オックスフォード滞在中に多くの立派な仕事をなした。その中でも Tripitaka すなわち三藏と称する莫大な聖典の全目録を編纂した。それは、大小一千六百六十二巻の異った聖典を含んでいる。各々の梵語の名称が還元され、その翻訳の年代、そして間接的にその原典成立年代の最小限度が決定されている。(『南条文雄』より)

いま、この書の扉をみると、「明治十六年癸未鵬・日本真宗南条文雄訳補」とみえる。まことヨーロッパの学界において、漢訳三藏經典が改めて意義づけられたのは、実にこの「南条目録」によるのである。そもそも、漢訳大藏經がフランス国民図書館に入ったのは一八七九年、すなわちビュルヌフの死(一八五二)後三十年のことである。ところが、英国では既にそれよりも早く、岩倉具視公を通じて寄贈された黄檗版一切經が英国インド省に保管されていた。しかし、この大藏經に手をつける学人がなく、僅かにシナ学者で佛教研究家であったサミュエル・ビール(Samuel Beal, 1825-1888) が着手し、一八七六年に『佛教三藏』(The Buddhist Tripitaka, 1876) を公刊したに過ぎなかった。けれどもこの書には誤謬もあった——寄贈直前、外務省の役人が勝手に抜き出したために書冊の秩序が乱れていたのをビールがそのまま訳出した(『懷旧録』一七九頁)——ため、学界はシナ藏經に対する周到な学術用の藏經解題を切望していた。こうした学的要望から『南条目録』が生れたのであり、これによって「南条目録の名のみひとり泰西の学界を風靡するに至った」(羽溪了諦「泰西学界に及ぼせる南条博士の影響」——『南条文雄』三三三頁)という。

この目録は、漢訳佛典に対してそれぞれの原典名としての梵語を加え、それに訳者、翻訳年時を添え、間接的にその原典成立年代の最小限度が決定されている。又、シナ撰述の書目については相当の解説を加え、附録としてインド、シナの佛教思想家や訳者の説明をなし、梵語による索引や著者及び訳者による索引まで附したものである。このように、この目録こそ漢訳藏經に言及した学界唯一の權威をもつものであり、これによって、西欧の学者間にも漢訳佛典

に対する研究心を大いに喚起した。けれど「南条カタログ何番」ということで漢訳佛典が明示されることは、ひとり西欧学者に限らず佛教学者にとって重要な羅針盤であり、その学的価値は依然として学界に九鼎大呂の重きをなしている。因みにこの目録は、一九二九年（昭和四）博士一周忌記念刊行事業として再刊され、次いで翌一九三〇年、同記念会刊行事業として『大藏経南条目録補正索引』（Japanese Alphabetical Index of Nanjo's Catalogue of the Buddhist Tripitaka）が世に出た。オックスフォード大学がマスター・オブ・アーツの名誉学位（Honoris Causa）を贈ったのは、一に『南条目録』の業績に対するものに他ならない。

ロンドンにおける彼の業績はこれだけに止まらない。(1)梵文「阿弥陀経」が一八八〇年（明治一三）の『皇立亜細亜協会』（Journal of Royal Asiatic Society）誌上に恩師マックス・ミュラーの英訳と共に掲載され(2)翌一八八一年（明治一四）の『オックスフォード逸書』（Anecdota Oxoniensia）第一輯第一巻には「金剛般若経」原文が掲載され、(3)一八八三年（明治一六）の同『逸書』第一輯第二巻には「無量寿経及び阿弥陀経」が、(4)一八八四年（明治一七）の同『逸書』第一輯第三巻には「般若心経」及び「尊勝陀羅尼」がマックス・ミュラー・南条文雄協同出版として公表された。

三

先生が一八八四年（明治一七）に御帰朝になってから、始めて正式の梵語梵文学の研究が我邦に移植されたのである。而して、先生の始めて移植された一粒の種子が年々に蕃茂し、竟に今日の隆盛を来たしたのである。此点から申せば、先生はげに我邦の梵語学將た又之に伴ひ起りし佛教に対する新研究の魁をせられたものであり、我邦に於ける斯界の歴史上特筆大書すべき偉勲者であり、千載に亘りて永く後人の忘るべからざる大恩人であられたと申さなくてはならない。（松本文三郎「学界における南条先生」『南条文雄』二四頁）

ミュラーと南条文雄との友情親交は、ミュラーから南条に送られた書翰によくにじみ出ている。『南条先生遺芳』に収録されるミュラーの書翰（そこには師弟の温かい心のつながりがうかがわれるし、ミュラーが南条に如何に多くを期待し、又、南条がミュラーの期待に應えていったかがしられる。わが国の佛教学研究は、南条文雄の帰朝によって大きく転回した。そして、佛教経典が日本の佛教学徒に親しまれるようになり、今までと違って原典による研究がおのずから佛教学の領野を占めるようになった。今日のインド学佛教学は、実にこの研究方法をもってその第一歩を踏み出したと言つてよい。ただし、わが国における近代科学的佛教学研究の黎明である。

一九〇六年（明治三九）南条文雄は帝国学士院会員となった。帰朝後は、学事に多忙な身でありながらもミュラーの期待に應えて梵語資料の校訂と佛教学研究を孜孜として続けた。そして、一九一二年（明治四五）にはケルン（J. Kern, 1833-1917）と共に校訂した『梵文法華経』の第一分冊が刊行され、一九一七年（大正六）に完成した。その和訳も『梵漢対照新訳法華経』となつて、一九一三年（大正二）泉芳環共著のもとに出版された。更に、楞伽經の梵文校訂『梵文入楞伽經』が古稀記念祝賀会より刊行（大正二）された。その他、明治佛教界に残された著作業績については、『南条博士著作年表』（『南条先生』所収・石崎達二作成）に詳しく紹介されている。

このように、学者として斯界第一人者の位置にあった南条先生は、学事に教導に持た又事務に、凡そ如何なる方面でも秀れた才能をもっていたようである。しかし、門弟の談（『南条文雄』所収・稲葉昌丸）「教界における南条先生」によれば、「明治十七年帰朝已来、先生は甚だ事務を喜ばざる風あり。事務に関与すべき機会は一再ならずしも毎に之を避けた」という。けれども、こと学事に関しては敢て辞退しなかつた。一八八五年（明治一八）東京大学文学部の嘱託講師として、又、真宗大谷教校普通高等科によつて専ら梵語と英語を教授した。爾来、名古屋普通教校長（一八八八年・四〇歳）真宗第一中学寮長（一八九四年・四六歳）真宗京都中学寮長（一八九六年・四八歳）真宗大学監（一九〇三年・五五歳）等の職を歴任している。特に、真宗大学が単科大学令によつて現在の大谷大学となつたのは、実に南条

博士の盡力に負うものである。そして、一九一四年（大正三）六十六歳にして真宗大谷大学の学長に、越えて一九二二、二三年（七四―五歳）には大谷大学長の要職に就き、同年に大谷大学名誉教授の称号を受けている。南条博士が、学事に関与しつても事務に携わらなかつたことについては、且て「事務の才に非ず」と固く誠めた養父南条神興の訓誠に由来するのであろうか。けれども、教化と伝道においては衽席の温まる日もないまでに励んでゐる。殊に布教面にあつては、本山の命はもとより私人の招待にも万事を措いて出講したと言われ、その足跡は全国に遍くゆきわたり、朝鮮、満洲、上海等、凡そ近隣にして足を踏み入れない土地はなかつた。その講話は徒らに理論を弄せず誰にでも理解しやすく、先生のために入信した人も多かつたと言う。

その当時は猶私の郷里の越後には汽車がなく、交通の不便な時代であつたが、先生が伝道に御座ると云へば大変な騒ぎで、何処もかしこも聴衆堂に溢れて、門前には賑やかな売物店が出るやうな有様であつた。今から思へば、先生は当時四十歳を二つ三つ出られたばかりの時代で、その盛名実に全教界を圧して、小学校に通い初めたばかり位の私共の小さな頭の中にも、先生は偉い人だといふことが強く植えつけられてゐたのであつた。（赤沼智善「為法不為身の先生」―『南条文雄』三五一―六頁）

と評している。けだし、明治佛教界の先達として不滅の灯を点じた学人としての南条文雄博士は、同時に又、偉大な伝道者であつた。その意味において、先生こそ明治の教界において最も衆生縁の広かつた人と言つて過言ではあるまい。

清沢満之は、

先生はたとえは洪鐘の如きか、これを叩くこと大なればその音大なり。これを叩くこといよいよ大なれば、その音もいよいよ大なり。

と、南条文雄を評したという。南条文雄のすべては、この短かいことばの中に言いつくされてゐる。その自叙伝『懐

旧録』にもみえるように、彼の身辺は頗る多忙であった。殊に一九二三年（大正一二）の関東震災には、生涯の伴侶だった書籍のすべてを烏有に帰せしめた。しかも、転々として住居の定まらなかつた彼にとつては、何処の地と雖も仮りの宿に映じたことであろう。

南条文雄その人にとって、その生涯の思想上、信仰上の唯一の避難所は「為法不為身」の五文字であつた、という。この五文字こそは、かつて闍蔵の際に深い感銘をうけた中国宗代の高僧明教大師契嵩の語である。それは、何事も法のためであつてわが身のためにはない、との義であるが、この信条こそ彼の生涯を貫ぬいたモットーであり、事実この五文字を身を以て実践した。特に、明治維新以後の廃佛毀釈という事実を体験した彼にとつて、「今の時に当り、佛教を挽回する者は余を措いて其れ誰ぞや」という烈々たる感慨が漲つていた。彼こそは「為法不為身」の聖語の中にみずからを照し、作すべきを作し已つたというべきであろう。今、この稿を結ぶにあたり、自著『懐旧録』の最後にみえる「爪雪処七十九年」と題する一文を掲げて、晩年の老博士を偲ぶよすがとしたい。

私の養父（南条文雄は嘉永二年（一八四九）五月十二日、大垣市船町の大谷派誓運寺に生れ、二十三歳の時福井県南条郡金粕村憶念寺住職南条神興の養嗣子となる）は、嘗て頼山陽の筆になる爪雪処の三字額を愛蔵して居た。淮南子に出づる言葉で鴻（鳥の名）が暖気を受けて北地に去るに臨み雪に爪跡を遺して再び来らん時の覚えとなすが如く、在るに似て空しさ仮の住居といふ意味である。

之より私は此処に於てかかる字義の詮索をしやうとするのではない。仮の住居といふ意味を有する爪雪処の話が、私の生涯にいかにも似合はしい感じがするのである。

住居に就いて大きく云へば、日本から英国へ、同じく日本にあつても美濃に生れ越前に赴き、東京に住み又京都にあることも屢々で、東奔西走殆んど居所を定むるの暇さへ無かつたといつてもよい。更に別の意味から考へて見ても、美濃の生家は明治二十四年の震災に倒壊し、最近関東大地震には麴町の住宅も書庫も尽く烏有灰燼に帰してしまつて、その後漸く探しあてた

のが今の青山の小廬である。之がどうして爪雪処でないであろうか。私は今尚ほこの茅屋を爪雪処と名付け、実妹の計に接したその日から養父の号を受けて、別に小老南と云ってゐるのである。仮りの住居と云へば此身も亦仮りの器である。私が曩に閨蔵の際、私の感激せしめられた言葉があつた。明教大師契嵩の「為法不為身」の法語が即ちそれである。恐らく仮の器なるが故に身の為めにせずして、法の為めにすべきものであらう。

今日私は視力聴力共に衰へ、少しの書見にも直ちに睡眠を催して全く何事もなすなき体になつてしまつたが、幸に心眼だけは尚ほ法の為めに開いて居て呉れるのである。興いたれば即ち読み勞すれば即ち眠る。僅かに筆硯と詩文に親しんで自ら無聊を遣つてゐるが、為法不為身の法語は今も尚肝に銘してゐる。此先いかに遷りゆかうとも、それは唯私の仮りの世の習ひに委すのみである。

と。この一文を熟読していると、「目も見えず候。何事もみな忘れて候上に、人などに明らかにもうすべき身にもあらず候」（末燈鈔）と仰せられた親鸞聖人の御消息の法語がよみがえってくる。

南条文雄先生は、一九二七年（昭和二）十一月九日午前三時、七十九歳を以て世を去つた。院号を「為法院」という。その温和のうちにも情熱にあふれた肖像画は、われわれに烈々たる氣迫をもつて何かを語りかけているようである。

付記

この稿を草するに当り、左記の書・論攷を参考にした。

『南条先生』（南条先生頌徳記念会刊）

『懐旧録』（自著）

『南条先生遺芳』（南条先生遺芳刊行会）

『明治百年の宗教覚書』―南条文雄―（柏原祐泉・『中外日報』昭和四二・七・十二）

『佛教百年・求道の人びと』―南条文雄（柏原祐泉・『朝日新聞』昭和二・六・十一）

筆者は、かつて家永三郎編『日本佛教思想の展開―人とその思想―』（平楽寺書店）において「南条文雄」に關する一文を草した。ここに改めて筆を執るにあたり、再録した部分も多いことを断わっておきたい。

（一九六八・三・二〇）